

第1回 第二次新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議

日 時：平成26年6月26日（木）午後6時10分～8時26分

会 場：中央図書館3階 研修室1

次第

- 1 開会
- 2 館長挨拶
- 3 委員自己紹介
- 4 事務局職員紹介
- 5 座長選出
- 6 座長挨拶
- 7 議事
 - (1) 「第二次新潟市子ども読書活動推進計画」の策定について
 - (2) 現行計画における新潟市の取り組みについて
 - (3) 意見発表
- 8 その他
- 9 閉会

・出席者

委 員： 荒川正昭委員・逢坂健太郎委員・押木和子委員・児玉イツ子委員・佐藤勇委員
事務局： 山川正士館長・山下洋子サービス課長・松田玲子サービス課長補佐・小林恵子
サービス課主任・持田和男サービス課主任・青野萌主査・太田知美主査・小林
友治主査

・傍聴者 2名

1 開会

(司 会)

ただいまより、第1回第二次新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を開催いたします。

本日の進行を担当いたします、中央図書館サービス課の松田と申します。

この有識者会議は、市民の皆様に公開しております。本日、傍聴なさる方がお二人いらっしゃいます。

2 館長挨拶

開会にあたりまして、中央図書館長の山川よりごあいさつを申し上げます。

(山川館長)

このたびは、子ども読書活動推進計画の第二次計画の策定にあたりまして、有識者会議の委員をお引き受けいただき、本当にありがとうございます。

スタッフの方から、すでにご説明には伺っていると思えますけれども、新潟市では、子どもの読書活動の推進に関する法律に基づきまして、現在の計画を策定いたしました。この計画が今年度をもちまして計画の最終年次ということでございまして、平成27年度からの第二次の計画をつくろうということで、ついては、有識者の方からご意見をちょうだいしたいということでお願いを申し上げたわけでございます。

法律の基本理念には、「子どもの読書活動は子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものである」ということが述べられています。まさにそのとおりであるわけです。それに異論があるという人は、まずいないと思います。しかし、そのことを証明できるかとなると、どうでしょうか。そういう意味で、今年3月に文部科学省が発表した調査結果、皆様のところには資料として概要版をお配りしてございますけれども、「全国学力学習状況調査の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」というものがございまして、ここにおいて家庭での読書や読み聞かせ、学校での言語活動の充実などが子どもの学力に大きな効果があるという分析結果が出たことは、大変重要な意義があると思っております。図書館とか読書推進活動をしているサイドからの調査ではない中で、そういうことが言われたということは、大変意義があることだと思っております。

国の第三次計画の中での施策を見てみますと、その多くは既に新潟市において取り組んでいるものでございます。ただ、やっているということだけで満足するのではなくて、より深く、より幅広く、さらに様々なやり方の工夫といったことを考えていくことが、より

効果を上げるために必要であると思います。そういう意味で、有識者の皆様方からは様々なご意見、ご提言をちょうだいできればありがたいと思っております。回数が3回ということに限られておりますけれども、いただいた提言を図書館だけでなく市役所全体で受け止めまして、次の計画でどういうことができるのだろうかということを考えてまいりたいと思っておりますので、どうぞ忌憚のないご意見をいただければありがたいと思います。よろしく願いいたします。

3 委員自己紹介

(司 会)

第1回の会議ですので、委員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと思います。

詳しいご紹介は、後ほど委員の方の意見発表のときをお願いしたいと思います。ここでは簡単に、荒川委員から席の順番でお願いいたします。

(荒川委員)

新潟県健康づくり・スポーツ医科学センターで働いています荒川でございます。現在、この図書館の協議会の委員をしております。第一次推進計画のときも参加していましたが、また皆さんと一緒に勉強したいと思っております。

(逢坂委員)

新潟市立白山小学校の校長を務めております、逢坂健太郎と申します。

白山小学校は、県の学校図書館協議会の事務局をやっております。県S L A (学校図書館協議会) と県小S L Aの会長を務めております。そのような立場にありますが、なかなか私自身が勉強不足のところがたくさんありますので、一緒に学んでいきたいと思いません。

(押木委員)

新潟高校の国語の教員をしております押木和子と申します。

所属は新潟県高等学校図書館協議会事務局長ということになっております。この団体は、平成22年にできたばかりの若い団体なのですけれども、全国S L A (学校図書館協議会) の下で高等学校の図書館活動を充実させるために日々計画を立てたり、連絡を取り合ったりしているところでございます。

(佐藤委員)

市内で小児科の医院を開設している佐藤といいます。荒川先生と一緒に、私も第一次のときからこの委員会の会議に参加しているのですが、あまりできが悪かったので留年と言われてまして、今回再任になってしまいました(笑)。

前回、非常に楽しく仕事をさせてもらいました。それは、ブックスタートをやりたいという気持ちがあって参加したのですが、それが実現したことと、それから、この会議を通じて、私、医師ですので、読書のことはまったく専門外だったのですが、いろいろな委員の先生からとても楽しい話を聞きました。（前回委員だった）間藤先生が、ここで絵本を読んだのが忘れられなかったし、宮下先生が、「学校の図書館司書というのは、養護教諭と同じような立場だよ」とおっしゃられたときに、自分の中でストーンと中に入って、やっぱり彼女たちを守らないといけないなという思いがすごく湧いてきました。何ができるかまだ分からないのですが、3回、よろしくお願いします。

（児玉委員）

児玉と申します。今現在、西川図書館でボランティア活動をしておりまして、6年目を迎えております。そのほかの仕事では、中央短大、それからNSGで非常勤を務めさせてもらっています。私の話したいことを聞いてもらえたらうれしいかなと思って、今日やってまいりました。

4 事務局職員自己紹介

（司 会）

続きまして、事務局職員の自己紹介をさせていただきます。

——職員自己紹介——

5 座長選出

（司 会）

続きまして、座長の選出に移りたいと思います。座長の選出は、有識者会議開催要綱第5条第1項により「委員の互選」となっております。選出について、立候補や推薦などありますでしょうか。

（佐藤委員）

荒川先生をお願いします。

（司 会）

荒川先生という声が出ましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」との声あり）

座長は荒川委員をお願いいたします。恐れ入りますが、席を座長席に移っていただけますでしょうか。

続きまして、副座長の選出に移りたいと思います。副座長は規程により、座長の指名となっております。荒川座長、早速ですが、副座長の指名をお願いできますでしょうか。

(荒川座長)

副座長には逢坂さんをお願いしたいと思います。

(司 会)

それでは、逢坂委員、よろしく願いいたします。

それでは、荒川座長よりご挨拶をお願いいたします。

(荒川座長)

ただいま皆さんからご推薦いただきまして座長を務めますが、大役でございますが、皆さんと一緒に、この子ども読書活動推進について勉強したいと思います。よろしくお願い致します。

私自身は、実は新潟市が政令都市になる前に、教育ビジョンを立てようということで、私もそこに参加させていただきまして、教育ビジョンを立てて、その線に沿って子どもの読書活動推進計画が始まったと思っています。お手元にありますように、平成20年度、21年度で非常に立派なものができまして、5年経ってしまったのですが、これをさらにブラッシュアップして、いかにして子どもの読書活動を推進するかということで、大変重い仕事でございますが、重いだけにやりがいのある仕事でございます。3回でございますが、皆様方の忌憚のないご意見を賜りまして、そして、これを行政の方に反映していきたいと思っています。もちろん行政もそれなりの限界もありますが、私たちは大きな夢を語って、その中でまた優先順位もありますので、最後まで皆さんと一緒に勉強したいと思います。

(司 会)

会議資料は事前に委員の皆様にお渡ししてありますけれども、追加資料といたしまして、座席表、有識者会議開催要綱、押木委員の意見発表の資料、「にいがた共有通信」の33号の4点がございます。「にいがた共有通信」は、今回は学校図書館の特集になっておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

会議の進行は、次第に沿って荒川座長より進めていただきます。事務局から第二次計画の策定についてと、現行計画の取組、成果・課題の説明をさせていただき、その後、各委員の意見発表、そして意見交換を行います。会議の終了時間は、午後8時30分を予定しております。

なお、本日の会議につきましては、市民に公開するため録音させていただきますことを、予めご了承いただきたいと思います。

それでは、荒川座長、進行をお願いいたします。

7 議事

(1) 「第二次新潟市子ども読書活動推進計画」の策定について

(荒川座長)

それでは、議事に入りたい。(1)について、事務局から説明してもらおう。

(事務局)

委員の皆様には予め事前にご説明申し上げており、本日は委員の皆様からのご意見と意見交換がメインということで考えているので、説明は簡単にさせていただきたい。

資料1の1番目に「計画策定の趣旨」がある。新潟市では法律に基づき、平成22年3月に現在の計画を策定した。計画期間が今年度までの5年間で、子どもたちが本に親しみ、読書習慣を身につけることを願い、子どもにかかわる人や機関が連携して豊かな子どもの読書環境づくりを進めることを目指した。計画期間が今年度で終了することから、現行の計画の成果と課題を踏まえ、新潟市教育ビジョン第3期実施計画との整合性を取りながら、第二次計画を策定する。現行計画の主な取組等は、後ほど説明させていただく。

計画の範囲は、教育委員会及び市長部局の実施する子どもの読書にかかわる施策を対象とする全市的計画とし、計画の期間は平成27年度からの5年間。策定の体制は、16の課と機関による庁内推進会議が、皆様、有識者会議の意見をいただきながら策定し、策定に当たっては、読み聞かせボランティアや保育園・幼稚園・小中学校などや図書館協議会から意見聴取を行い、パブリックコメントを実施する。スケジュールは、記載のとおりだ。

(荒川座長)

1・2を聞いて、ご意見は後からまとめてお聞きする。

(2) 現行計画における新潟市の取組について報告

(事務局)

資料2をご覧ください。平成22年度から25年度まで取り組んだ実績から、主な取組と成果と課題の概要をまとめたものだ。これらの取組は、資料の右下にある「新潟市子ども読書活動推進計画庁内推進会議」の16の課・機関が連携して行っているものだ。

家庭での主な取組は「ブックスタート」だ。先ほど佐藤委員がおっしゃられたとおり、現行の計画策定を契機として、多数のボランティアの協力により実施している。毎年、1歳の9割以上の対象者がブックスタートに参加しているが、今後さらに参加率を上げてい

くことが課題となっている。

保育園・幼稚園での主な取組は、保育課が平成23年度に「地域子ども絵本ふれあい事業」により、多数の保育園・幼稚園などに絵本を設置したことだ。また、園では職員向けの研修を実施しているが、今後もボランティアの導入や職員研修の充実と保護者向けの研修の実施などが必要だ。

学校では、学校図書館の蔵書の充実と電算化に取組み、学校図書館支援センターによる学校司書への支援と学校への図書の搬送を行った。学校図書館の活用を進めるため、教諭と司書の合同研修会を実施している。これらの取組により学校図書館の基盤整備が進み、読書活動が活発化してきた。グラフにあるように、小学校での貸出冊数は大幅に増加したが、中学校では増加していないことが課題となっている。併せて、読書だけでなく、図書館が学習・情報センターとして活用できるように取組を進めることが必要だ。

最後に、地域。ブックスタートの実施に併せて市立図書館では、育児などに役立つ本をそろえた「子育て応援コーナー」を設置し、公民館など子どもと保護者が集まる様々な場所で絵本の読み聞かせを行ってきた。読み聞かせには多数のボランティアが活動しているが、今後も活動の支援と養成が必要だ。また、グラフにあるように、市立図書館での児童書の貸出冊数が減少していることから、子どもを連れた保護者が来館しやすいような工夫を進めていく。

次に、資料の2-2が、現在の計画の体系となっている。左側の縦の欄には、子どもの読書活動推進に取り組む場所を記載し、上の横の欄には、それぞれの事業を行っている課や機関が書かれている。

次に、資料の2-3は、この計画の体系ごとに各課が取り組んだ内容の詳細が書かれている。これらをまとめたものが、はじめにご説明した概要版だ。

(荒川座長)

ただいまの1と2の配付資料について、どなたか質問、ご意見があればお願いします。

(逢坂委員)

資料2の学校の部分で、成果と課題の中で、児童一人あたりの貸出冊数は大幅に増加していると、中学校では図書館利用は増えていないという課題が出ているが、基データがあったら教えてもらいたい。

(事務局)

こちらの成果と課題の右側に、計画策定前の平成22年度の数値と24年度の数値が、小学校と中学校と分けてグラフで出ている。

(荒川座長)

その数値を教えてほしいのだ。

(逢坂委員)

これは、総合教育センターのデータか。

(事務局)

教育委員会学務課が毎年学校に調査している数値だ。一番新しい数値が平成24年度だが、例えば平成17年度とか合併前と数値を比べると、数字は決して減少しているわけではない。ただ、計画を策定した時点と比べたときに、本当に少ない動きだが、増えてはいないという数字になっている。

(逢坂委員)

あとでまたちょっとお聞きしたい。

(荒川座長)

ほかに、よろしいか。

(3) 意見発表

(荒川座長)

これから子どもの読書活動について日頃のお考え、または現行の計画についての評価、あるいは、これからの第二次計画について皆さんのご意見を賜りたいと思っている。そこで皆さんのご意見を賜りながら、質問があったら随時答えてもらう、と思っている。

意見発表は、一人15分と書いてあるが、足りないと思う人、また、余る人があるかもしれないが、およその目安としておいていきたい。

では、逢坂さんからどうぞ。

(逢坂委員)

押木先生のように資料は用意していないが、これまでの取組の成果と課題を読ませていただき、感じたことを話をさせていただく。

最初に、先ほどの質問の件だが、実は総合教育センターの調査によれば、例えば中学校2年生の経年変化を見ると、23、24、25年度と生徒が1か月で読む本の冊数というのは増えているという数値が出ている。もちろん小学校の方も5年生を見ても、10冊以上読むという子どもが23年度は29.1%、24年度が30.3%で、25年度については33.7%というように右肩上がりだ。

それと同時に、「本を読むことが好きですか」といった質問に対しても、小学生でいえば42.5、45.2、47.1と、読書が好きな子どもは確実に増えている。これは、やはり一次推進計画に基づいてそれぞれの関係各課の取組が、成果を上げているあらわれの一つである

と私は思っている。

学校関係のところ、資料2-3の6ページ、7ページをお開きいただきたい。まず、一次計画スタートの時点で、確か校園長研修会で中央図書館の館長さんが来られて、子ども読書活動推進計画の説明をした。計画が現場に浸透するには、かなり時間とエネルギーが必要かと思うが、スタートの段階できちんと校長に対して図書館長が来て説明してくれたということで、校長自身の意識が図書館の方に向いた。

それから、何と言っても一番学校現場としてうれしいのは、人がいる図書館であるということだ。県全体を見ると、各市町村によって差がある中で、新潟市については旧市の時から学校図書館司書を配置していた。合併があり、新潟市が大きくなっても、図書館司書を全校配置してくれているということは、本当に現場としてはありがたい。学校図書館は、読書センターであり、学習センターであり、情報センターである。プラス、ある子どもにとっては心の居場所でもある。そこに行けば司書さんがいるというのは、本当に学校現場にとっては大きなことで、感謝申し上げたい。

11ページの学校図書館支援センターについては、平成20年度から試行が始まり、支援センターが始まった。学校司書は、全校配置ではあるが、8ページのデータにあるように、正規の職員は9名。それ以外の人たちはすべて非常勤の勤務、臨時の勤務ということになっている。当初は、司書さんの中でも図書館に対する思いであるとか、仕事の仕方であるとか、そういったものに、かなり学校間で差があった。それが、この支援センターができたことによって、直接司書さんたちにいろいろな研修の機会が設けられた。現在は、学校間の差がないとは言わないが、当初から見ると、司書さん同士の情報交換も密になってきたし、学校によって大きく違うということは、少なくなってきたのではないかと考えている。

そのあらわれの一つが、相談件数が22年度が436件だったものが2,556件になった。これは、司書さんたち自身が課題意識というか、もっといい学校図書館にしていこうという気持ちのあらわれではないかと、私は数字を見て思った。

あと、12ページだが、特別支援学校への支援ということで取組があった。成果・課題とそこに書かれているとおりだが、新潟市は政令市になったときの教育施策の目玉として、特別支援教育の充実を掲げてきた。現実的に、特別支援学級の設置がどんどん増えている。小学校も中学校も同じだ。つまり、特別支援学級に在籍する子どもが増えている中で、また、新潟市が市立の西特別支援学校（今回、読書活動で文科大臣表彰を受けたが）を新設して5年目を迎えている。第二次計画でも特別支援学級・学校への支援というあたりを一つの視点として考えていくといいと思う。

いずれにしても、手前味噌だが、我が協議会が読書感想文コンクールというものをやっている。全県的にも学校統合が進み、児童数は毎年2,000から3,000人くらい減少しているのが実態だ。その中で感想文の応募数が、少しずつではあるが、今増えているという大変うれしい現実がある。これはやはり冒頭に話があったように、本は、ただ読めでは、なかなか子どもたちの力は伸びない。読んでどうするかということで、現場の先生方が読書活動、読書感想文を書くという活動を再評価しているのだと思う。学習指導要領の目玉である言語活動の充実とも関連してくるわけだが、教員の意識も少し変わってきて、忙しい中ではあるけれども、子どもたちの力をつけるには有効な手段なのだということが、先生方が分かってくれてきているのだと感じている。感想文が増えているというのは、そういうふうには私は受け取っている。

もう一つは、行政のこういった施策が成果を上げていて、冒頭の話に戻るが、数字的には本が好きだという子どもが増えているという結果が出ている。学校現場としては大変ありがたかった。

(荒川座長)

では、押木先生からお願いします。

(押木委員)

私は素人なので話があちこちいくと思い、資料を用意したので、それに沿って説明したい。

私は高校籍で義務教育にかかわっておらず、どうしても小中学校の様子が分からなかったもので、今の話は非常に参考になった。そのうえで、日頃考えていることで述べさせていただきます。

高校にいと、読書力のある子とない子の差ができていのように感じている。現任校もそうだし、前任校もどの学校でも、読める子はどんどん読み、たくさん本を借りて、そしてそれをアウトプットしていく力があるが、一方で、やはり本を手にしなない、活字が苦手という生徒が、確実にいる。

今まで新潟市は「読書のすすめ」で、絵本の読み聞かせやブックトーク、パネルシアター等、本を紹介する活動を一生懸命やっているといると思うが、これからは本をどうやって読んだらいいのか分からない子たちに何か伝えていったらいいのではないかと。先ほど配られた資料に、大江山中学の実践報告で、授業の最初の何分かに本を朗読したら、後は自分で読めたというのがあった。

(事務局)

「共育通信」ですね。

(押木委員)

「共有通信」の中の真ん中に、「授業で利用される学校図書館と司書の役割」で大江山中学校が出ている。それによれば、村上春樹の『沈黙』の前半を司書が朗読し、そしたら続きは黙読できた。こういうのも非常に効果があるので、読めるようになるスキルを伝えていく、あるいは一緒に読むなどの活動が何か必要になってくるのではないかなと感じている。

それから、小中高と発達段階によって読書の意味もやり方も変わってくると思うが、連携がまだ足りないのではないかな。私も今日初めて逢坂先生の話聞いて、そうなのかなということがあった。多分小学校・中学校で、図書館の利用方法を勉強してきているはずなのだが、高校でオリエンテーションをすると、分類番号が分からない、参考図書の使い方が分からないという子がいる。もうちょっと連絡を密にしていた方がいいのではないかなということを感じている。

私は実は平成23年度・24年度、国立青少年教育振興機構で青少年の読書調査のワーキンググループに参加した。そこで作った資料の中に、中高生が本を読まない理由は、よく部活動や勉強で忙しくて読めないのだと言われているが、時間がないからではなくて読む習慣がない、つまり、読んだことがない、あるいは読みたいと思う本がないという、それが一番の理由だという調査結果が出た。だから、忙しいから読めないのだと思わずに、読む習慣をつけていく、そういう取組を市や学校はしていかなければいけないのではないかなと感じている。

それから、学校の図書館及び地域の図書館で1か月に借りた本の冊数が0冊という生徒が、(全国だが)中学校で70%、高校で80%という結果が、残念だが、出ている。また、先ほどの概要の資料にも、中学生の一人あたりの年間貸出冊数が、逢坂先生の資料(1か月に読んだ本の冊数)では増えているが、市の資料(学校図書館における貸出冊数)では減少傾向にあるという結果が出ている。

全体に中・高校生に関しては、貸出冊数そのものは減っているのではないかなというのが、よく話題になっている。それがいったいどんな理由なのか、もしかしたら、通学する範囲が広がって持ち歩くのが大変だからとか、あるいは気軽に文庫本を買うのが楽だからとかという理由があるかもしれないが、そこら辺を調査していただきたいと感じている。

続いて、現行の計画の取組について。ブックスタートの事業については、本当に始まってよかったなと思っていて、実際にボランティアに参加している方の話を聞き、すばらしい試みだと思っている。これをさらによりよいものにしていくためには、フォローアップの事業が必要なのではないかなと感じている。

私もまだ具体的には思いつかないのだが、1歳のお子さんに本を手渡して終わりではなくて、その後もずっと継続的に保護者に読書のすすめや、こんな本はいかがですかという資料の提供など、あるいは講演会の案内など、何かそういう情報を与え続けるというのが必要なのではないかと。

次に、学校図書館支援センターを中心とした学校図書館の活性化、こちらも素晴らしい。新潟市は学校図書館先進都市だと言われているが、まさにそのとおりで、素晴らしい数値だと思っている。システムや整備、環境は素晴らしいので、今度は質を上げていくのが重要だ。1つは、研修も既に充実していると書いてあるけれども、今は臨時の職員の方がたくさんいて、研修に出られないという方もいる。できるだけ正規以外の方にも情報や研修の機会が行き渡ったら、より質が高くなるのではないかと感じている。

それから、市内のすべての学校に司書が配置されているが、学校規模が違う。大きい学校や児童生徒が大変多い学校も少ない学校も、1人でやるというのは非常に負担の差があると思う。勤務形態も違ったりしているので、できるだけ学校の事情に合わせて、そこら辺は臨機応変な対応があったらいいのではないかと。

さらに、後でも述べるが、どうしても学校図書館は読書センターとしての色合いが濃く、今までは読書教育、あるいは読書のすすめが仕事のメインだった気がする。徐々に学校図書館を使った授業も広まりつつある。しかし、実施例や身近な実例が少なく、積極的に取り組むという先生が多いとは聞いていない。しかし、情報を蓄積して多くの先生方に追試したり、検討したり、研究会を行っていけるとよいと思った。図書館を使った授業の実践記録をデータベース化して、追試できるシステムを作ってはどうかと考えている。これは先行例として東京学芸大学が主催で、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」というのがある。これでも十分新潟市が参考にできると思うが、身近な新潟市の先生方がこんな授業をやっているというのは励みにもなるし、参考になるのではないかと。

次に、計画の進行管理を行う市内推進会議の設置ということだが、合併が進んで地域の格差が浮き彫りになり、諸問題も明らかになったと書いてあった。それに対するきめ細かい対応、それを考えてほしい、それが今度の策定の意義の一つだと思っている。

そして、これは本当に私の個人的な感想だが、子どもに対する施策はどこの市町村も非常に多いけれども、中高生に対するサポートや事業が少ないのではないかと感じている。

「③ 第二次計画への考え」ということで、今思いつく限りなので限られたものだが、書き出してみた。資料にいただいた新潟市教育ビジョンによると、新潟市が目指す子どもの姿・市民の姿に、「学力・体力に自信を持ち、世界と共に生きる心豊かな子ども」「生

涯を通じて学び育つ、人間力あふれる新潟市民」とある。これに合致した図書館環境、あるいは図書館指導をしていかなければならないのではないかと考えた。

1 番目に、これはぜひお伝えしたかったのだが、子どもたちが自信を持ち、自己肯定感を持っていくには、読書が非常に重要な鍵だと私は感じている。やっぱり子どもたちは忙しい。優先順位をつけていくと、今は特に中高生はスマホや携帯、いろいろなものがあるって、読書が後になっていく。その中で読書習慣をつけさせる取組が必要なのではないか。

「朝読」は、かなり新潟市は進んでいる。私の学校でも「朝読」をしているが、これは非常に有効な時間だ。ただ、読みっぱなしではなくて、より質の高い読書が「朝読」の時間にできるように働きかけていかなければならないのではないかと、それには教員の意識が大事なので、教員対象の研修もやっていただきたい。

それから、「朝読」に追加してだが、家庭でおうちの方と一緒に本を読もう、同じ本を読もうという「うちどく」という取組が行われている。それを新潟市で進めていくことはできないだろうかということ考えた。

今、子どもたちはゲーム、SNSに囲まれている。学校ではICT教育と称して電子黒板があったり、パソコンを授業で使ったりデジタル化の進む社会の中で育っている。そういう子どもたちに対して何ができるかということ、忘れてはならないと思っている。家庭では新聞を取らないおうちも多いし、紙ベースの本がない、電子書籍だけというお宅も増えているようだ。そうすると、逆に学校図書館は貴重な場だ。学校図書館でこそ参考図書の使い方とか、資料を読んだり、まとめたりという使い方を学ぶ体験ができる。紙ベースの本が学校にたくさんある。それを体験できる場として学校図書館を意義付け、利用していく必要がある。

また、このデジタル化の中で紙ベースの本、ページをめくって読むところでこそ子どもが育つという場面があった。先ほど来、学校図書館が心に傷を負った生徒、あるいは教室に出られない生徒の居場所になっているという話があったが、そういう生徒たちも本は一生懸命読んでいる。そういう子たちもいるので、紙ベースの本を読む意味というものも私たちはもっと考え、伝えていかなければならないと思っている。

それから3番目、これは私も詳しく分からないのだが、渡された資料を読んだ限りでは、司書教諭の研修というのがあまりないような、司書教諭は一体どんな存在なのかというのが明らかでないような気がした。注目されているのは学校司書だった。12学級以上の学校に司書教諭を置かなければならないという法律があるにもかかわらず、司書教諭の位置づけが曖昧であり、活躍ができていないような印象を受けている。横浜市では、司書教諭ガイドブックという、こういう立派な冊子が作られていて、配布されているようだ。新潟

市はいったい司書教諭と司書をどのように協働させていくのかということ、考えていただきたい。

4番目、生涯を通じて自立的に学べる市民を育成するためにも公共図書館の存在意義と利用の方法を学ぶ必要がある。学校図書館で終わりというわけではなく、やっぱり生涯学ぶ、生涯本を読むという姿勢を培っていくには、公共図書館の存在を知って使っていかなければならないのではないかと。でも、ほとんどの生徒は市立図書館に行ったことがないという。もちろんヘビーユーザーもいるが、行ったことがないという子が多い。そこで、中学校の1年生に全員授業の一環で近くの図書館に行ってみるとか、ツアーをしてもらい、館内案内をもらうことができないだろうか。

最後に、先ほど私は中高生対象の支援が足りないのではないかと申し上げたが、例えば授業と連携できそうな読書会とか、ビブリオバトルとか、調べ学習コンクールなどのイベントを学校と共同で公共図書館が企画する。そして、市内の中高生が本を通じて交流できる場を作っていったらどうか。難しいとは思いますが、何か方法を探してほしいと思っている。必読図書ブックリストなどを作成していただいて、子どもたちが本を選ぶときに参考になるものがあるといいなと思った。

参考として書いておいた、(東出雲町というのがなくなって松江市になったけれども)、『東出雲発！ 学校図書館改革の軌跡～身近な図書館から図書館活用教育へ』、これは非常に参考になった。小中学校と町が一体になって学校図書館を変えていったという足跡をまとめたものだ。この中にブックリストを作成したら非常に本を読むようになったというのがあったので、参考に挙げた。以上、私の意見だ。

(荒川座長)

では、佐藤さん、お願いします。

(佐藤委員)

私は小児科医なので、逢坂先生とか押木先生のように資料をもとに話すことがあまりない、読書の専門家でも何でもない。実際に診察室から子どもたちを見ていて感じたことを、ここでお伝えすることが自分の役割だと思うので、そういう視点で少しお話をさせてもらう。

押木先生が指摘されたが、「自己肯定感」、これは本当にキーワードだ。ユニセフが2007年に、OECD諸国の15歳の子どもたちにアンケートをとって、日本の子どもが、「I feel lonely」と感じている子が29.8%もいる。これはほかの諸外国に比べて圧倒的に多い。こういう子どもたちの現状を踏まえると、やっぱりそれを何とかする鍵が読書にあると思っている。読書だけではないが、子どもたちに充実した生活を送ってほしい、そのために

何ができるかということを考えていきたい。

私の診察室から見ている子どもたちの風景で一番気になるのは、中学校・高校になって、もう小児科の年齢を過ぎた子たちが帰ってきているケースが結構ある。どういうことかという、学校に行けない子、あるいは学校に行きづらい子、特に高校生が小児科に来ることは今までほとんどなかったのだが、意外と進学校に行っている子が、生きるのがつらくなって病院に来る。学校の先生からは心療内科に行けと言われて、行くと薬を飲まされるだけで全然解決しないので、お母さんが考えて、やっぱり小児科の先生に話を聞いてもらうというので来るケースが結構ある。彼女たち、彼らの話を聞いていると、学校現場は読書をする余裕もないのだなというふうな実感がある。

ちょっと振り返って自分のことを考えてみると、僕は読書の専門でもなんでもないが、ただ、高校時代、確かに本をいっぱい読んだし、気がついたら夜明けだったという経験をしている。高校時代はそういうことができる年だったが、彼女たち、彼らの高校時代と比べるとあまりにも違うなと思って、ここは何とかしてあげないとだめなんだというのが、すごく実感として感じる。

もう一つは、押木先生がおっしゃったようにメディアリテラシーだ。はっきり言うと、小児科医の立場としては、子ども読書活動推進有識者会議の一番の目的は、今回はメディアに対決するために読書を何とかすすめていきたいと考えている。私もこの体型なので、保健所から子どもの生活習慣病の話をしてくれと言われるのが一番辛くて、この体で何を言うのだと思うのだけれども、時々話をする。

油というのは、習慣性がある。食べていると、やはり油がほしくなる。油に対抗するのに出汁文化。これは京都大学の農学部の先生に直接お話を伺ったのだが、出汁が習慣性があるのだと。だから、油に対抗するには出汁をもっと広めていったらいいのではないかという話を聞いて納得したのだが、今の子どもたちのメディアに囲まれた生活に対決していくには、もっともっと読書をすすめないといけないだろうと、読書の楽しさを教えなければいけないだろうと思う。

今日、この会議に出る前にある保育園で「早寝早起き朝ごはん」、「メディアと子ども」というテーマで約1時間話をしてきた。その中で、先ほど出雲の話が出たのであと思ったのだが、実は出雲の雲南小学校の先生が、2005年にノーテレビデーを2週間やる。ノーテレビデーを2週間やったあとに子どもたちの変化を追いかけていくのだが、やめて1か月经ち、2か月经ち、3か月经ってもテレビの視聴時間は増えない。確かに子どもたちの文字の書き方が丁寧になっている。どうしてだか分からないが、メディアを断ち切ることで子どもたちに変化が起こっているとしたら、逆に今子どもたちがメディアにさらされて

いることで大きな変化が起こっているのだろう、僕らの知らないところで何か起こっているのかもしれないという感じをすごく思う。どう進めていったらいいか分からないのだけれども、とりあえず子どもたちをメディアから断ち切るためには、読書の習慣を作らなければいけない。そのときに鍵になるのは、これも僕自身の生活を考えると、僕が本を読むようになったのは、父親が貧しい生活をしていただけだけれども、同人誌に投稿して3等になったりとか、うちの姉が直木賞とか芥川賞が出るとすぐ買って来て読んだとか、やっぱり家庭の環境というのはすごく大きいと思う。何かシステムを作って本を読むようになるかというところではなくて、周りが読むから読むようになるのだと、そこにもう少し立ち入ってかないと、大きな変革はないと思う。

今、私が感じたメディアの問題も、子どもを変えるというよりも大人を変えていかないといけない。同じ視点で見ると、読書も、もしかしたら子どもを変えるよりも、こんなことを言うと怒られるかもしれないけれども、一番やりたいのは、学校の先生方に何冊読んでいますかとアンケートをとりたい。多分この会に来られている先生方は本当に本が好きで、(第一次で委員だった)宮下先生もそうだし、本当に本が好きなことは分かるけれども、みんながみんなそうではない。学校の先生たちが本が好きでないと、子どもたちに本をすすめられないだろう。もっと言うと、学校の先生たちは本を読む余裕がないと、子どもたちに本を読めと言えないじゃないか。僕が校医をやっている学校に行っても、先生方は本当に大変だ。子どもたちのために時間を使っているのではなくて、余計なことに時間を使っているように見えてしまって、そこを何とかしてあげないといけない。子どもたちにそういう面の改革も必要ではないかと思っている。

その視点で見ていくと、学童に関して言えば、学童保育だ。学童保育は、決していい環境で行われていない。子どもたちは「ひまわりが大嫌い」という子が一杯いる。実際にちょっと見ても、狭いところで、遊ぶ相手もいなくて、詰められているという環境がとても多い。新潟市は6年生まで対象にしてやるが、学童保育の人たちを支援してやらないと、子どもたちに読書をすすめられないという気がすごくしている。

学校図書館司書の人もそうだが、子どもたちを取り巻く環境の背中を押してあげること、それを作らないと、子どもたちの生活は変わらないと思っている。逢坂先生が言われたが、図書館司書の立場というのはちょっと意味が違っていて、図書館司書は養護教諭と同じように弱い立場なんだよと、宮下先生が僕に教えてくれた。僕は養護教諭と付き合いがいろいろあるので、本当に熱心な養護教諭もいるのだけれども、学校の中ではなかなか決定権がないし、自分たちがすすめられないこともいっぱいある。同じように司書の先生も、多分いろいろなことを考えているのだろうけれども、学校の中では一般の先生とはちょっと

違う立場だし、言えないものもあるのかなと、その辺を司書の先生とか学童保育とか、そういう人たちを支えていく。

保育士もそうだ。保育士も絵本の読み聞かせをやっているが、彼らは学校や専門学校で読み聞かせなんか学んでいない。学問としてなんて全然学んでいない。だけど、子どもたちがいるので、みんな独学で読み聞かせを学び、その技術を得て子どもたちに教えている。そういう周りを支援することをどんどんやっていくと、子どもが変わっていくのではないか。子どもが本を読むようになれば、もう少しメディアとの距離が置けるのではないか、もっと楽しいものがあるのではないか。

雲南市でやったノーテレビデーの効果は、実はメディアを2週間やめたら、夜、親とランプをやったり、日曜日に親と外へ出かけたり、親もテレビを見なくなったので、やることないから、子どもを連れ出して生活を変えていった。そうすると、もっと楽しいことが分かってどんどん続いたという話みたいなので、ぜひ、そういう形でこの運動を進めることで、子どもたちをメディアから遠ざけることができればいいなと思っている。

(荒川座長)

児玉さん、お願いします。

(児玉委員)

今、佐藤先生のお話を聞いていて、やっぱり読書は楽しくなければならぬ。そこが大元なのではないか。それを辿っていくと家庭の環境、ここが一番大きい。その中で保育園では、もう0歳からお子さんを預かっている、そのような環境がものすごく多くある。保育園に、長い子は6年もある。この間にどのくらい先生方が絵本の楽しさを共有しあって育てていくか、このあたりはものすごく重要な鍵を握っているような感じがする。

でも、現状として保育園も幼稚園も、バラバラではないかなという感じがする。たまたま今日、あるお母さんが子どもを保育園にやっているのだけれども、保育園では朝と夕方テレビを見せている、本は月刊誌があるくらいで非常にお粗末だという話を聞いた。そういう話からも園によってバラバラなのだなというのが見えてくる。だから、保育園とか幼稚園の専門学校で、絵本そのものが充実して授業が行われているかという、実際はどうなのだろうかというものも出てくる。言語表現で15コマ、数年前から科目として入ってきている。そこで授業で教えている先生方のかかわりも大きいと思うが、まったく絵本を知らない、楽しんでこなかったという学生が圧倒的に多い。絵本を小さいときから読んできてもらっている学生がどれだけいるかという、本当に一握りくらい。だから、いわゆるダジャレっぽいもの、キャラクター的なものを選ぶ。優れた絵本、例えば『こちょこちょ』があったとしても、『いないいないばあ』があったりしても、どちらかという瀬

川康男さん、松谷みよ子さんは選ばない。漫画的な仕掛け本のようなものを選んで、こっちがいいと言う。それを崩して行って、本当にやっていくものは至難の業だ。そういうなかで将来、保育園の先生、幼稚園の先生になっていくわけなので、絵本のことを知らない先生が非常に多いのではないか。もちろん一生懸命やっている保育園も幼稚園もあると思うが、その積み重ねがすごく大事なような気がする。

保護者、家庭はというと、忙しいからなかなか家では読んであげられませんというような現状があるときに、保育園・幼稚園は何をして、それを家庭の中に送り込んでいくか。「園だより」だけではだめだ。やっぱり「クラスだより」というのがあり、そのところで本当に地道に積み重ねていかないとだめなのではないかという感じがする。

保育園ではものすごく先生方は忙しい。だから、空いた隙間の中で絵本を事務的に読む、そういうふうな傾向も結構あるのではないか。

佐藤先生がおっしゃったように、大変失礼なのですがけれども、学校の先生方に、その本を買っていますかとか、例えば何冊くらい読んでいますとか、保育士にも幼稚園の先生方にもどのくらい自分のお金で絵本を買っていますかとか、読んでいますか、どんな絵本が好きですかとか、題名まで書いてもらったら私などはすごくいいと思う。失礼だけれども、こんなようなのを読んでいきますとかというような、おおざっぱで具体的なものが出ていないと、なかなか分からないようなものがあるのではないか。

私も保育園に長年勤めさせてもらったが、絵本を本当に保護者に浸透させていくのにはものすごく時間もかかる。先生方も勉強していかないと、一人一人の先生方が、本当にその子どもと一緒にこの絵本を楽しもうねと、そこまで行き着くには勉強を重ねて行って、みんな一貫性を持った中で共有し合わないと、なかなか土台・基礎が作れない。そうすると、自ずと先生方はお母さんに知らせていく。子どもとのやり取りの中で先生方が知らせていくから、「この絵本がすごく好きなんですよ」と言うと、「そうなんですか」と言って、「借りて行っていいですか」、「どうぞどうぞ」というふうなやりとりになる。お母さん方に難しいものを提供してやるのではなくて、足元で楽しんだものを提供して、無理なく家庭の中に入れて込んでいくというふうなものも非常に大事ではないかという感じがする。

(荒川座長)

今までのお話を拝聴して、ある種の問題提起、あるいは問題点の発掘ということでかなり話が出たと思うので、私が話すのも屋上屋を重ねることになってしまうので、ちょっと気が引けるところもある。

今、新潟市がやっているブックスタートや学校図書館の活動、これは非常にいいことで、

しかも、その中に学校図書司書とか、問題はあがるが、姿勢は私は高く評価したいと思うし、本当によくやっているということで感心している。

さらにもう一步踏み出そうということだと思うが、中高校生のところでどうなのだろうということが一番問題だと思うし、おそらくこれが第二次の一つの焦点になるのではないかと私は理解している。現実には、やはりほとんどの中学生、ほとんどの高校生は塾に行っている。行くなというのは無理なんで、現実に行っているし、それから、周りにはメディアが山ほどある。

実は私、平成10年に大学を辞めてから、だいたい年間に10から15くらいの高校を回っている。主に医師を志望する生徒や、そのほかここ5～6年は看護師志望、つまり医療職志望の生徒と懇談している。そういう中で見ていると、学校側はとにかく医学部に何人入ったということで学校の生徒数が決まるから、目の色を変えて頑張っている。これは分からないでもないことだが、私の立場からすると医者は増やしたいと思うので、これも分かるのだが、そういうことの中で、なかなか大きな問題だなという気がする。

その意味では、中学生に読書は大事だと、あるいは必要だということはどうしたら理解できるかという仕掛けがあるわけで、それが大事だ。私は平成16年から3年半、大学入試センターの理事長として入試センターの元締めをしていた。医者でありながら入試の専門家として入試のことばかりやってきて、そのときは全国の高校を回ったり、いろいろな高校生と話したり見ている。入試センターの地歴公民から英語、国語、数学、理科と並んでいるあの点数によってほとんど進学が決まってしまう。医学部へ行くならば、最低85点90点取らないとだめだと、東大理Ⅲ基準とか、確かに全国を見ると100点取るやつが何人もいるのでびっくりするが、そういう世界だ。

その中で見ていると、実は国語の力がなければセンター試験はいい点が取れないというのが僕の実感だ。なぜかという、例えば数学の問題を見る、英語の問題を見る、理科の問題を見る、あるいは社会の地歴公民を見る、パッと見てすぐ理解する、これは実は読解力なのだ。国語の力なのだ。国語の力がなくて、あのセンター試験を切り抜けるのは難しい。国語の力というのは非常に大きい。英語の力を伸ばすには、国語の力がなくてだめだということを実際に見て、そんな気がする。改めて国語の力が受験勉強の役に立つよということを言わないと、言えば中学生、目を向くかもしれないが、そういうことが実はあると私は見ている。

そういう中でどうしようかということだが、やはり今のそういう風潮は急に変えられなければ、図書館に行くことが、少なくとも自分の進学の勉強に役に立つということが、実例としてないといけな。そうすると、図書の内容は、もちろん人間をつくるための読書

と同じように、学習に役立つ図書の内容ということで、そういう内容的なことも少し考えていく必要があるのではないかなという気がちょっとしている。

そして、先ほど出たが、学校から帰ってきて塾もやった、しかし、そこで親がひっくり返ってビール飲んでテレビを見ているのでは、とても子どもは本を読もうとなるわけがない。やはり子どもが帰ってきたときに、親がちゃんと本を読んでいるとか、そういうことがあれば、子どももああそうかと思うわけで、これは佐藤先生がおっしゃったように、親の教育がないとおそらくできない。また、同時に教員が勉強しないかという、これもまた大変言いにくいことを言うが、教員もやはり本を読んで、いつも学校の先生は事務室で本を読んでいるということがあれば、これは一つの大きな影響を持つだろう。そこら辺の教育をどうしようかということも大きな問題だと思っている。

もう一つは、小学生では本を読んでいて、中学・高校で読まないということだ。実は私、今、健康づくりセンターで高校生のトップアスリートの医学サポートと同時に、中高年の人たちの健康サポートをやっている。医者の仕事をしているわけだ。それをやっているとちょっと限界を感じている。中高年の健康は大事、私も含めて大事だけれども、私も含めてほしいカウントダウン、先が見えている。そういう見えている人たちのことも大事だけれども、実はそうでなくて、一番大事な健康づくりは小学生だと思う。小学生の健康づくりを地域あるいは学校単位でやっていく、そこに保護者が入る。その保護者は20代、30代の若者だ。そういう小学生、学校、保護者を含めた健康づくりをしていく。健康づくりとは何かというと、体力づくりであり、生活習慣を変えることだが、その中に読書が入っていくことも必要だ。

入試センター試験を実際にやってみて、これは間違いなく体力、気力の勝負だ。これがなかったら、あのセンター試験は通っていけない。体力・気力がなければやっていけない。体力・気力というのは何かというと、小学生のときの体力だろうと、そこにまずもっていかなければいけない。脳という臓器は、スポーツの骨とか筋肉を一生懸命鍛える。だけど、脳だって臓器としては脳を鍛えなければだめだ。受験戦争はトレーニングだ。勉強して、休んで、うまいものを食べるというリズム、そういう脳のトレーニングもある。小学校のときの親も含めた生活習慣、そこに体力と生活習慣と同時に、本を読むということをどう持っていくか。それを中学生にどう引き継ぐかということが非常に大事ではないかなと思っている。そういうところにこれから焦点を当てて、具体的にどうしていくかということを考えていった方がいいのではないかなということ、何となく思っている。どういうふうにできるか分からないが、ぜひ、これから皆さんと一緒に議論してみたいと思っている。

(荒川座長)

再開する。

これから意見交換に入る。焦点を絞って、例えば問題としてはブックスタートとか幼児、小学校あたりの問題、それからやはり中学の問題、それも学校の問題、家庭の問題、地域の問題とある。それから、高校までいけるかどうか、高校は対象になっているかもしれない。図書館自体の問題もある。そのようなことを整理しながら、それぞれ皆さんお話をしたらどうか。

そうしましたら、まず、非常に成果は上がっているが、ブックスタートが始まる幼児から小学校あたりのことについて、何かさらにご意見はないか。ブックスタートで満足せず、もう一步踏み出そうということだが、佐藤先生、何かそれについていかがか。

(佐藤委員)

ブックスタートが入って非常に効果があった。資料2-3の読書活動推進計画に基づく各課の取組内容で各課が書いているが、ブックスタートをやったことで甘んじているかなという感じがすごくする。これで終わりではない、ブックスタートはあくまでスタートなので、これをどう引き継いでいくかということに関してもう少し施策を打った方が多分いいのと思う。

(荒川座長)

具体的に言うと、それをきっかけにして保護者の方にも絵本に関心を持って、できれば買っていただきたいとか、あるいは図書館に行けばありますよとかというようなことか。

(佐藤委員)

僕は個人的に、ほんぽ一とをすすめている。ほんぽ一とは子ども連れでもいいよ、日曜日でも行けるよとお母さんに言うと、そんなところがあるのですかと言われる。まだまだ周知ができていない。絵本を買おうとなると、絵本はすごく高いし、すぐ絶版になってしまう。部数が少ないものだから、やっぱり図書館とか公共の施設を利用して、お母さんとか小さい子が行きやすい公共の施設を増やした方が、多分有効なのではないかと思う。

(荒川座長)

新潟の各地区に図書館があるが、それでだいたい済むのか。もっと身近なところに必要か、そこのあたりはどうなのか。

(佐藤委員)

身近な場所に必要じゃないか。ただ、一つのネックは、今の若いお母さんたちは、子ど

もと2人でじっと家の中にもっていることが結構多い。子育て支援センターに行くのが苦手というお母さんがいる。人と話せないというお母さんがとてもいる。私、社会福祉協議会が子ども未来課の委託を受けてやっている子育て支援電話センター「きらきら」にかかわって運営委員をやっているのだが、そういう相談がすごく多い。匿名なら相談できる、メールなら相談できる。でも、人とは接しない。だから、そこを切り崩していくためにも、何か上からこういうのをやってあげるではなくて、そういう人たちが来たがるような場所づくりがすごく大事なのかなと。

(荒川座長)

何かほかに、幼児あるいは小学生を含めてあるか。自由にご発言いただきたい。

(押木委員)

どういう要素があるとお母さんは来たがるのか。

(佐藤委員)

例えば子育て支援センターでこういう支援をやってあげますよというところに行きたくないけれども、同じお母さん同士なら話をしたいと、ピアカウンセリングと同じ発想なのだ。何かをしてあげるではなくて、同じように悩んでいる人たちが集まるような場で自由に本が読めたりとかできれば、もう少し広がるのかなという気がする。本の専門家、読み聞かせの専門家がいて教えてあげるといのは、とてもそんなの聞きたくない。自分と同じように本なんか読んだことのないお母さん同士が集まって、読んだことないよねという話ができれば、少し気が楽になるのかなと。

(押木委員)

図書館だと、うるさくしてはいけないとか、いくら「こどもとしょかん」だって声が聞こえるのではないかと心配されるお母さんがいる。子どもが大きい声を出したり。それがまったくOKで、お母さん同士で読みあってもいいよという場合は、ほんぽーとはあるのか。

(佐藤委員)

ほんぽーとは、比較的騒いでいる子もいる。

(荒川座長)

地域のコミュニティセンターや、公民館は使えるのか。

(事務局)

ほんぽーとは、いつでもお子さん連れの方は歓迎なのだが、実際には静かなスペースもあるので、そちらの方で騒ぐと苦情が来る。「こどもとしょかん」の中では自由にしていた方がいいのだが、それでもやっぱり来にくいという方がいるので、今年度から「赤ち

ゃんタイム」というのを毎週火曜日の午前10時から午後1時まで3時間設けた。皆さんどうぞおいでくださいということでポスターを作ったり、館内で呼びかけたりして、乳児向け、小さいお子さん向けの「おはなしのじかん」をやったり、おもちゃを保育室からおろしてきて、おもちゃで遊んでいただいたり、ほんの3時間なのだが、皆さんゆっくりしてくださいというふうな、そういう試みを始めたところだ。

(押木委員)

小児科とかお母さんたちが行くような場所にも、宣伝のチラシとかはあるのか。

(事務局)

「市報にいがた」とか「区だより」には載せている。黒井健さんの大きいポスターは佐藤先生のところにも貼ってあった。いろいろなところに周知できているかというのと、まだちょっと進んでいないので、それをこれからやらなくてはいけないかなと思う。

(事務局)

「赤ちゃんタイム」という話があったが、それも本当に限られた時間だ。何とか図書館に子ども連れの方に来ていただきたいと思っている。それで、ブックスタート等を通じて図書館の案内を配布したりとやっているが、忙しくて来られないという方も、ブックスタートでアンケートをとったときにはあった。行こうと思っても、子ども連れだと、子どもの声がうるさいと、職員やほかの利用者の方から注意されることがあって行きにくいという話もある。子どもはこれからの新潟を背負っていく子どもさんをもっと温かい目で見守って、子どもって少くらい声を出すんですよという寛容な目で見ていただきたい。特に子どもの声がうるさいと言う方は、中高年の男性がどちらかというとい多いので、そういう方には働きかけをしていきたいと思っており、もっと思い切って一歩踏み出したいところだが、難しい。ご高齢の男性も居場所を求めて図書館利用の方が多いので。

(荒川座長)

児玉さんは今のお話で何かあるか。

(児玉委員)

「赤ちゃんタイム」は別の部屋で、時間が限られたものではなくて、自由にそこが使って、遊べて、好きな絵本を持って来て、そこで親子でかかわるといような、そんな関係ができるといいなどは、今、聞きながら思った。しかし、子どもを連れて図書館まで行くということが、車に乗って、バスに乗ってとか、そういうような距離感がある人は、なかなか行きたいと思っても、出かけるものに勇気がいる。だから、さっき佐藤先生が言われたように、ミニでもいいからそういうような機関がところどころにあつたらいいかなと、ぜいたくなのかもしれないがそういう感じがする。

(荒川座長)

自由になるのは土日だ。そういうときに保育園と幼児、小学校の生徒、保護者が、学校なりそういうところを使って、一つのイベントとして読書の感想のイベントなどを集まって楽しくやるとか、そういうことも動機付けとしては必要かもしれない。大勢集まって読書について話し合ったり、遊ぶとか、そういうことも必要かもしれない。いろいろ企画もちょっといるかもしれない。一人で図書館へ行けといってもなかなか行けないけれども、まとまって地区で、あるいは学校でやるとなれば、それも一つの方法かもしれない。時々そういうことで刺激を与えるということもあるかもしれない。

(事務局)

実は、結構いろいろなことをやっている。就学までということでは、まず、母子手帳にブックスタートのことが書いてある。4か月の股関節検診には、全員に対してブックスタートよりも詳しく書いてあるような、図書館の案内も含めたパンフレットを配っている。ブックスタートのときには、同じように図書館のこともアピールしているような、本を読みましょうとか、そういうものとリストも配布している。3歳になったときにも、3歳児検診でやはりおすすめの本のリストを配っている。いろいろなことをやっているが、もっと足りないのかなと。

(荒川座長)

足りないというか、どうそこを突き抜けるかということだろう。やっていることは十分いいことをやっているし、立派だと思うが、そこをどう突き抜けていくかということだ。

(逢坂委員)

今ほど話題になっているように、やはり新潟市は大変広い。地域的に広くて、地理的にも誰もがすぐ公立図書館へ行けるかということ、そうではない人たちの方が多いのではないか。その中で、学校図書館が何ができるかということ考えたときに、今回、取組の中にあつたが、夏期地域開放というのをやっている。当初は35校だったものが、25年度には85校と、倍以上に増えている。これは教育委員会からの働きかけも強くあつたのだが、おそらく26年度は100校を超えるのではないか。

学校図書館に関して言えば、小さいお子さん大歓迎ですよ、いくらでもどうぞというようなスタンスで宣伝していけば、公立図書館はちょっと気兼ねがあるけれども、学校なら行けるといふ人が、もしかしたらいるかもしれない。そんなことが学校図書館としてはできるのかなと考えていた。

(荒川座長)

新潟市の小学生は非常に成績がいいようだが、これは何か学校で工夫はしているのか。

先生方は、小学校の場合は子どもの読書活動に、どんなふうに関与しているのか。

(逢坂委員)

読書が好きな子どもが多いということか。

(荒川座長)

(貸出冊数などの)数字が高い。これはモチベーションを与えるようなことを学校を通じてやっているのか。

(逢坂委員)

それは、やはり私は一番大きいのは、人がいる図書館であるということがあると思う。あとは、先ほど押木先生が司書教諭の話をされたが、司書教諭というのが12学級以上の学校には配置が義務づけられており、教育委員会が教員を配置する際には、そこまで考えてきちんとやっている。

司書教諭は、小学校では学級担任がおそらく100%だと思う。級外ということはある得ない。そんなときに、配置されている図書館司書さんと常に連絡を取りながら、決して任せっきりにはしていることはないと思うし、司書教諭が責任を持ってやっている。どの学校でも、司書さんが一人でやっていることはないし、司書教諭が一人でやっていることもない。お互いに連携しながら図書館経営をしている。

(荒川座長)

ブックスタートで90%で100%にいかない、その一番の要因は何なのか。

(事務局)

1歳誕生歯科健診を受診した方の中で、ブックスタートを受けない方も少しはいるが、会場に来た方についてはほぼ98~99%はできている。歯がまだ生えていないとか、忙しくて健診に行けないとか、いろいろな事情で歯の健診自体を受けない方も中にはいる。そういう方については、図書館でも受けることができますと引換券に書いてお渡しはしているが、なかなか図書館までおいでいただくというのが難しいようで、100%にはならない。今、92~93%くらいだ。

(荒川座長)

また後で戻っていいのだが、先にいって、中学生で貸し出しがガクンと減る、これについて皆さんいろいろ意見が出された。中学生に対するアプローチというのは、何か付け加えるなり、改めていかがか。押木先生、いろいろ書かれたがどうか。

(押木委員)

私が聞きたいのは、先ほど逢坂先生が言われていたように、総合教育センターの出された資料だと中学で貸出冊数が増えているということかという点だ。

(逢坂委員)

経年変化で見ると、増えている。

(押木委員)

「朝読」もだいたい90%くらいやっている。

(逢坂委員)

そのとおり。今、新潟市の学校は、おそらく毎日ではないが、例えば曜日を決めてやったりとか、何らかの形で「朝読」はやっていると思う。

(押木委員)

中学で私が分からないのは、学校図書館を授業でどのくらい使っているのか。小学校は必ず1週間に1時間、図書館の時間があるが、中学校はなくなる。読書の時間というのは、どのくらい確保されているのかということをお聞きできたら。それが減るのは大きいと思う。

(事務局)

学校図書館支援センターで小中学校を回っている。読書の時間というのは、図書館をその学級が優先して使える配当時間ということで、教科としてはだいたい国語の教科の中に含まれている。小学校はその配当時間というのが毎週必ずあるが、中学校はないのが現状だ。調べ学習などで使いたいというときに、この曜日のこの時間、何年何組が使いますということを学校図書館の司書に伝えて使うというくらいの利用の仕方だ。

(押木委員)

年間回数でどのくらい利用されているか。

(事務局)

数字としては把握していない。今年度、少していねいに調べてみようということで、学校訪問したときに聴き取りをしているところだ。

(押木委員)

感覚として、たくさん使われているなど感じられるか、それとも、まだまだだなどという感じか。

(事務局)

まだまだだ。たくさん使われるとは感じられない。

(押木委員)

高校で小中学校の読書活動を尋ねるアンケートをとると、小学校の時代に読んだ本はいっぱい書いてくるのに、中学時代にはわりと少ない。それから、調べ学習をさせると、資料の引き写しだけで、出典を書いたりという基礎的なことが身につけていないということがよくある。それがもったいない。小学校で身につけた読書習慣や学習習慣が中学校で活

かされて高校へ持って来たら、もっと充実したものになるのではないか。高校は課題研究とか、少しではあるが、レポートを読んだり書いたりが必要になる。そのときに、みんなができたらいいなと思うことはある。

(佐藤委員)

この会の一次のときに、保育園、小学校、中学校と視察に行って、ある中学校へお昼休みの時間帯に伺った。確かにパラパラ生徒はいるが、読んでいたのは全員がマンガ本だった。図書館にマンガ本があるのを知ったのもちょっと驚きだったが、マンガ本しか手にしない中学生を見てしまって、ちょっとショックを受けた。教育委員会の中で読書に熱心な先生は、どうも小学校の先生という印象があるのだが、中学校の先生で、読書活動に関して熱心な先生はいるのか。

(逢坂委員)

もちろん。中学校図書館協議会という組織もあるし、一生懸命な先生方はたくさんいる。

(佐藤委員)

多分絶対にいると思う。本が大好きな先生はたくさんいると思うのだが、中学校でそういう先生方がなかなか活躍できないとか、うまくやれないというような現状があるのか。

(逢坂委員)

そのようなことはないと思う。

(佐藤委員)

小学校に比べて自由度が少ないとか、学校でやる課題がすごく多いので、受験もあるから、そういう中で読書の時間が削られてきているというようなことはあるのか。

(逢坂委員)

中学校だからということを考えれば、やっぱり教科担任制だから、国語の先生が一生懸命やっている方が多い。国語の時数というのは限界があるので、自分がやりたいことについても、時間の制限があるということではないか。

(事務局)

昨年度、中教研（中学校教育研究協議会）の図書館部の先生方の研修の場に何人かでおじゃましたことがあった。学校図書館支援センターで何ができるかとか、公共図書館でどんなことをやっているかというようなお話をして、その後、グループ討議に加わらせていただいた。そのとき正直な言葉で、「忙しくて、なかなかできないのですよね、どうしたらいいでしょうね」、「やりたいのだけれども、できないのですよね」という方も何人かはいた。

先ほどの幼児のときも、保護者の方が忙しくて行けないとか、児玉委員が先ほど「保育

園でも先生が忙しくて」とか、忙しいというのをクリアする方法が何かないものなのかなと、思って聞いていた。全体を通してということになるのかもしれないが、それはまた後で、ご意見をぜひお聞かせいただきたい。

(佐藤委員)

忙しいということに関して言うと、私は今、新潟市の「子ども子育て会議」に入っていて、教育委員の方とも話をする機会があるが、確かに学校の先生は忙しいだろうと思う。やることがすごくいっぱいある。小児科医としてすごく危機感を感じているのは虐待の問題だ。それをやるためには、保健師とか医療職が学校に行って、もっと教育をしてあげたい、入り込みたいのだけれどもなかなかその辺がうまくいかない。

学校の先生は本当に頑張っているのだけれども、学校の先生方でやれることというのは決まっているし、できれば外部から支援してあげて、学校の先生たちの負担を減らして、読書活動が広がるようなことができれば一番いいのではないかとすごく思う。司書という役職だけではなくて、何か違う形でそれを援助することで、学校の図書館を有効に使えないだろうかと思うのだが、逢坂先生、いかがか。

(逢坂委員)

人的配置ということをおっしゃっているのか。

(佐藤委員)

それはもう限界があるので、ボランティアとか、いわゆる地域が一体になって、学校というのは本来地域の中にある存在であるから、地域の力を借りて何かやれることはないのかなと。

(逢坂委員)

地域と学校パートナーシップ事業は、25年度からすべての学校で実施されていて、おそらくどの学校でも地域ボランティアの読み聞かせが行われている。回数はおそらくとして、おそらく地域が一番入りやすいところだ。実際には、そういう面ではやっている学校がほとんどだと思う。当校でも2週間に1回、読み聞かせのボランティアが来てくれて、朝のスタートのときに読み聞かせをしていただいている。担任がやるのはまた違って、子どもたちを引きつける力というのは、すごいものがある。この中の事業の一環で研修を受けている方たちもたくさんいるので、子どもたちも喜んでいるし、学校としても大変ありがたい活動の一つだ。

(佐藤委員)

でも、中学校くらいになると、なかなか受け入れられない。

(逢坂委員)

中学校ではどうか。

(事務局)

中学校での読み聞かせは、特別支援学級の子どもたちに司書が読み聞かせてしているというのはよく聞く。ボランティア活動で中学校で昼休みにボランティアさんが来て、集まった中学生に読み聞かせをしているという学校も、少数だがある。ただ、組織として毎週1回とか、月何回とかということは、中学校では聞いたことがない。

(佐藤委員)

中学校は「俺に読み聞かせかよ」という感じで、受け入れにくいのではないかなと思うが。

(事務局)

そんなこともなく、校長先生が自ら全校朝会で絵本の読み聞かせをしたというのも聞いたことがある。

(佐藤委員)

中学校で？ それはすごい。

(事務局)

喜んで聞いていたようだ。

(佐藤委員)

意外と喜ぶかも。

(荒川座長)

中学生くらいになると、読書をするということ、あるいは図書室へ行くということが、いろいろな意味でメリットがあるという実感があれば行くのだろう。受験戦争ということは避けて通れないわけだから、ある程度結びつけることを考えなければいけないところもあると思う。受験はなんだかんだ言たって厳然たる事実としてあるわけで、それを避けてどうしようというわけにはいかない。どこかでうまく結びつけることを考えていかないと、知恵としては必要かもしれない。

今日のこの話は、高等学校までいくかどうか分からないが、実は入試センターにいるときに高校を回った。図書室へ行ったときに、実は予想に反して、例えば各教科の教科書が山ほどある。それを選んで使っている。入試センターの委員は作るときに、例えばだいたい40冊くらい教科書を読む。そこから出すわけだ。高校へ行けば、各教科の教科書がずらっとそろっていると思って、つまり使っている教科書はこれだけのものであっても、図書館へ行けば全部あると思ったら、ないのだ。あるのは、図書館の選定委員になった先生が、業者からもらった本を図書館に置いていくというのがあるけれども、実際に学校は、

すべての教科書を買って置くということは実はない。それはひと言で言えば、お金がないということだ。でも、全部買ったって数十万円くらいだけれども、それでもない。僕はそれがちょっと意外に思った。

(押木委員)

教科書の見本は、全教科ある。

(荒川座長)

新潟高校はあるかもしれないけれども、まずない。

(押木委員)

見本はどここの学校にもある。ただ、図書館にはない。多分教科に分かれて置かれている。

(荒川座長)

その見本を図書館に置くかどうか知らないけれども、とにかく図書館へ行ったらない。これは僕は意外だった。教科書くらいあったっていいじゃないかと思っていた。それは一種の驚きだった。例えば受験対策にしたって、あれば、何が出てくるか分かるかもしれない。なかったのには正直びっくりした。

高校はここで話が出ないと思うが、中学くらいだと思うが、ほかに何かあるか。あとは全般的なこと、あるいは地域とのかかわりでもいいし、何でもいいからお話をいただければと思う。あるいは学校そのもののあり方とか、図書館の皆さんにどう考えてもらうか。

図書館の皆さん、今日、お話を聞いて何か意見はないか、ベテランのプロがおられるわけだから、何か私たちだって、ここがどうだというようなことがあるか。

(山川館長)

読書というのは、今、事務局が図書館なのでつい図書館に引き寄せて考えがちだが、中学生の読書というのは、別に学校図書館で本を借りなくてもできる。公共図書館で借りてもいいし、自分で買っていいし、人から借りるとかでもいい。というふうに考えると、機会・場所・方法というのは様々ある。学校の図書館に入るのもどうかか思っている中学生は非常に多いとは思う。あるいは小さなお子さんをお持ちの親御さんも、忙しいとか、ちょっとおっくうだとか、行きづらいとかある中で、図書館とは関係のない、本当に例えばだが、小児科医院の中に、あるいは脇に本の置いてある交流スペースみたいなものがあると、「よいこの小児科さとう」さんは、病児保育というのをやっているが、そのバリエーションの一つとして、そういう場があれば、また違うのかなと。子どもはしょっちゅう病気になるわけだから小児科は必ず行く。毎月あるいは極端な場合、毎週行くという経験を私もしている。そういうところでそういうきっかけ、チャンスが一つ考えられないかなとか、わざわざ足を運ぶのではないところに機会を用意することができればいいなと思う

が、正直、なかなか難しいとは思う。それを行政側が組織的にやるというのは、なかなか大変だと思うが、何か突破口があって、そこから広がっていく、モデル的にやるとか、社会実験的にやるとか。たまたま今、小児科の話をしたが、いろいろなことが考えられるかなと思う。

学校図書館の地域開放というのも、今は本当に細々とした取組だが、やりようによっては、もっと積極的に、小さなお子さんもOKだし、あるいはお年寄りもOKですみたいなやり方をしてみることも、実際にやっているところがないわけではないので、やってみることもできると思う。ただ、それには人の配置だとか、施設を今のままでできるのかとか、学校の活動をしている時間帯にそれをやることができるのかどうかとか、様々な問題があるので、全市一斉は無理だけれども、モデル的にやってみるとか、様々な手段を用意するという事は大事かなと思う。

私は今、バス通勤なのだが、通勤・通学の人がみんなスマホかなと思うと、結構本を読んでいる方がいる。多いときは、スマホよりも本を読んでいる人が多いと思ったこともある。見渡すこのくらいの中に、10人くらいいるという状況もまだあるので、あながち日本も捨てたものではないかなと、それは小学生からお年寄りまでだ。機会やチャンスというのは、いろいろなところに用意されるといいのかなと思った。

(事務局)

同じことだが、今日、お配りした資料の中の概要のところ、私が説明しなかった左側の部分に、現行の子ども読書活動推進計画では、この3つの要素（「人」「本」「場所と時間」）が一体となって、と書いてある。先ほど来いろいろ話が出ているが、子どもに働きかけなければいけない周囲の大人、子どもたちの身近に遠くまで行かなくてもちょっと行ったら本があること、それから本を楽しむための場所と時間、これらが一体となって子どもの読書環境づくりを今も進めているわけだが、これらの要素をさらに広げていったり、深めていったりすることが第二次の計画では求められているのかなと思う。今、具体的な方策もいろいろとご提案いただいていたと思った。

(荒川座長)

それから、もう一つは、学校図書館の学習・情報センター、これは大きいと思う。具体策としていかに有効なものを作るか。これは多分、学校としては非常に大きな問題で、学校の問題もあるし、皆さん方がどうかかわるかということで、これは具体案としてこれから出していく必要があるかもしれない。情報センター・学習センター、つまりこれはどういうことかと言うと、生徒が行けば得するということだ。もっと言えば、行った方が、受験に役に立つ、広い意味でそういうこともある。なんだかんだ言たって、やっぱり受験

というのは大きな問題で、得なら行く。そこを含めて、これは非常に重いと思っている。

(山川館長)

押木先生が言われたような、授業などで学校図書館を利用する、活用するという点については、一人一人の先生としては中学校においてもやっている方はそれなりにいる。ただ、やっぱりそれが点としての活動であって、つながりをつけるのが難しいというのがあると思う。おっしゃるようなデータベースとか事例集というものを考える必要があるというのは、学校図書館支援センターの活動をやっている中で非常に今感じていることで、そういう働きかけは図書館の中だけではなくて、教育委員会の教員の研修をする部門の指導主事においても、そういう認識は既に持っていると思う。ただ、実際にそれをどうするかというのは、すぐにはできないことだと思うが、やろうとしていることだ。

(荒川座長)

これはやっぱり、キーパーソンとしては、学校図書館支援センターであり、学校の先生方、あるいは司書さん方だ。

(山川館長)

先生方も授業をやるときに、図書館に資料がある、あるいは学校図書館の司書が先生の授業のための資料を準備する手伝いができるというふうな関係ができると、学習・情報センターということが言えるのではないか。

(荒川座長)

せっかくいい施設をつくったわけだから、これをいかに活用するか、あるいは発展していくかということが大きな問題だ。これは夢のある話で、決して難しい話ではないと思うので、ぜひ、頑張ってもらいたい。

(佐藤委員)

学校で独自に図書館を利用している先生方というのは、ある程度つかまえていらっしゃるのか。

(事務局)

だいたいお話を伺っていて、大勢ではないですけども、小学校ではかなりの先生が図書館や図書館資料を使った授業をやっている。

(佐藤委員)

そういう現場にいらっしゃる先生に、アンケートをとるようなことはできないのか。

(事務局)

アンケートというか、もう実際にやっている実践事例集みたいなのはいただくことがある。市小研（小学校教育研究協議会）という、教科ごとの研修団体で図書館部というのが

あり、先生方は、毎年こういう授業をしましたという実践発表をしている。その場に私たちもお邪魔させていただいて伺っているし、図書館と総合教育センターで教諭と司書の合同研修の際、探求型学習の授業を実践している先生に発表していただいたこともある。

(山川館長)

という形で、とっかかりはつかみつつある。それをこれから一生懸命やっていく必要があるが、その部分については図書館というよりは、むしろ先生方の教育活動を支援する部門があり、そちらが中心になっていただく必要があるということで、教育委員会の事務局内部では働きかけをしているところだ。

(押木委員)

実際に授業で使うと、読書にも図書館を使う子どもたちが増えるのは確かだと思う。学習センター・情報センターとして利用すると、読書センターとしての利用も増えるという相乗効果があるので、点が線になって、線が面になっていくといいなと思う。

今、お話を伺っていて、私が知らなかったことがいっぱい、やっていないなと思っていたことを実はやっていたり、あるいは手薄だと思いこんでいたところが、実はすごく進んでいるということがあった。先ほど山下課長が言われていたが、この「本」「人」「場所と時間」というのは、ある程度、新潟市のどこかで少しずつやっていると思う。第二次推進計画は、どこを中心に充実させるかというのを明らかにして、そこを次に話し合っていっていいのかなという気がする。

(荒川座長)

今のお話の中で見ると、学校にもちゃんといて、そういうこともあるので、これをいかにうまく動かしていくかということ。それからもう一つは、ある種の大胆な試みをやる、いくつかのモデルを先進的なことをやってもらおうと、それを広げていくということも大事なことだと思う。多分学校差があると思う。一つの課題を持ってもらってやるということも、これは保育園も同じだと思う。そういうことも一つあるのではないかな。

それから、小児科の先生方も、関心がある先生がもしおられたら、もっと参加してもらおうということも大事ではないか。直接、接する方が多いわけだから。

(押木委員)

私は、メディアとの対決を打ち出さなければと思う。

(荒川座長)

それは難しい。テレビを見ない日というのも確かに一つの方法だと思うし、テレビも見るとくたびれるが。そろそろくたびれてもいい時期だと思うけれども、子どもは。

(佐藤委員)

ノーメディアデーは、学校でも結構やっているところがある。ただ、長期というのはなかなか難しい。1日とか2日ならやれるが、長期はできない。

それから、こういうことは語弊があるかもしれないが、今の学校の先生というのは、僕らが子どものときの学校の先生と違って、「こうしなさい」とはなかなか言えない。学校で決めて、ゲームをやめましょうと言えば一番簡単なのだろうけれども、そんなことは学校の方から言えない。だから、今、僕が一生懸命言っているのは、PTAから言ってくださいと、PTAからゲームを1週間やらない日を作ろうとか、そういう運動がわき上がれば、学校の先生も参加してくれるけれども、学校の先生から皆さんにやめましょうとは、なかなか言いづらいという現状があるみたいだ。

(逢坂委員)

今、お話を伺っていて強く感じたのは、やっぱり幼児期の取組が非常に大事なのだなということだ。さらに、スタートして、あとはご自由にというのではなくて、継続した働きかけ、情報提供というのをいかにしていねいにやっていくか、そういう体制・システムをどう作っていくか。学校図書館支援センターという体制があるが、幼稚園・保育園に対する支援というのは、図書館は教育委員会だから、直接的にはやっていない中で、その辺をどうすればいいのかというのは重要な課題になると思う。

(荒川座長)

それは一概に全部やるのではなくて、モデル地区を作ってやっていくとか、そういうことも一つの手かなと。それを真似して、みんなうちもやろう、うちもやろうとくるかもしれない、そこも大事だ。

(逢坂委員)

あと、校種間のつながりも大切だ。小中高というお話もあったが、さらに幼稚園・保育園からずっとつながっていく。ここで読書というテーマで連携を作ることができれば、同じ1人の子どもであり、その子どもの親であるわけなので、いい形になると思う。今、そこがパツッ、パツッと切れているところが問題だ。

(荒川座長)

スポーツ選手を育てるとき、小中高といくときにもそこに断絶がある。それはなかなか難しいのだ。そこをつなげるのは、どうも学校外のものがある。学校以外の2つのつながりがあってこそつながっていく。中学・高校へ行くと、スポーツはぶち切れる。それをどうつなげるというのは、スポーツ団体とかそういったいろいろなものが役に立っていることもある。だから、学校の外の力というのは、同じことでも大きいのではないか、必要ではないか。

(事務局)

ていねいな事柄をやっていく必要があると思うが、子ども読書活動推進計画の庁内推進会議が、教育委員会が中心だが、16の課・機関が入っていて、保育課や子ども未来課なども入っている。全体で例えば新潟子ども読書の日とか、子ども読書ウィークとか、そんなふうなものを設けてチラシやポスター等で呼びかけていく、これはていねいではないかもしれないが、広くPRができる方法かなと思うが。

(荒川座長)

いろいろなイベント、いろいろなテーマでやっている。交通安全にしる、犯罪防止にしる、やっている。それはあっていいじゃないか。

(事務局)

たくさんあって、あまり意味がないか。

(荒川座長)

やってみなければ分からない。やって、また変えればいいわけだから、大胆に考えていい。お金もかかるかもしれないが。

(佐藤委員)

個人的な意見だが、いろいろな課が横断的にやるというのは、すごく苦手な部分だ、新潟市は。何かそういうつながりが作っていただけたい。

(荒川座長)

そういう日を作ってやったらどうか、実際に。そして、そういう日は中央図書館に集まると、いろいろな本が見られるとか、地域の図書館でもいいと思うが、それはできるのではないか。

まだ言い足りないことがあるかもしれないが、こんなことがある、ここだけは言っておきたいということがあったら、願います。

(山川館長)

中高生のことで最近思っていることは、確かにまじめに読書と言われると、敬遠されがちな年代かもしれないが、ゲームとなると、非常に乗る。そういう意味で、はやりのビブリオバトルが非常に向いているのではないだろうか。高校生クイズ選手権とか何かで非常に盛り上がって、各学校、高校にクイズ部ができたりとかしている。一生懸命クイズのために勉強していると、すごく深い勉強していて、決勝戦は数学の問題を解いているみたいなことがテレビで出たりしている。それと似たような感じで、ビブリオバトルというのは、自分が気に入った本をほかの人にいかにもうまく紹介するか、その紹介の仕方が気に入って、この本がいいと思ったかどうかということで投票するというゲームみたいなもので、あの

年代には向いているかなと思うので、そんな取組をそれぞれモデル的にやってみる、あるいはやりたい人がやってみる。学校を通じてという、なかなか先生方も厳しいと思うが、学校の取組として全校ビブリオバトルというのをやって、うまくいっているという話も、この間、発表を聞いた。中学校だったか、まったくゲーム感覚で全員参加で、ものすごい成果が上がっているということだった。例えばそういう遊び感覚を入れた取組を、いろいろなところでできればいいなとも思う。

(事務局)

図書館ではそういう読書を広めていくための、推進していくためのいろいろな手法を集めて、こんな方法がありますよということで、学校や幼稚園・保育園、いろいろなところにすすめて紹介していく。本はこちらにありますとか、そういうやり方も、もっと必要かどうか。

(荒川座長)

図書館として仕掛けをつくって、それをやってもらうというのが出た。それは一つの方法だと思う。こっちから打って出るというやつだ。

(山川館長)

これも最近知ったことだが、本屋大賞というのが最近人気だが、そんなものの例えば子ども向け版とか、地域版でそういうことをやってみるとか。書店との連携を図書館が何らかの形でやってみる。あれは書店が中心だから盛り上がっているところがあるので、だから、あまり図書館が前に出ない形で。

(荒川座長)

新潟市を見ると、コンビニとかそういうのがあって小さい店がつぶれると、やはり書店も町内の小さいものは、残念ながらみんなつぶれていっている。うちの近所もそうだが、そこへ行くと注文してくれたのが、古いところがなくなってしまった。そうすると、名前を言って悪いが、ジュンク堂、紀伊國屋になってしまうということがある。でも、本屋との連携は一つの方法だろうと思うし、結果的に書店としては本が売れることはいいことだと思う。読書活動が進むということは本が売れるということにつながるの、それは決して悪いことではない。

(佐藤委員)

そういうのを高校生に、例えば、新潟高校がすすめる本とか、そういうことをやるのは乗ってくるか。

(押木委員)

大人がすすめる本には反応がある。ビブリオバトルについては今、各学校で文化祭でや

らないかという話も出ている。ビブリオバトルは、ちゃんと読んでプレゼンをしなければいけないので、わりとハードルが高い。知的レベルが高くないと難しいので、練習が必要だと思う。

(佐藤委員)

でも、今、日本の学生に一番必要なことなのではないか。

(押木委員)

そうだ。だから、遊びもいいが、授業でやってもいいと感じている。以前に3冊ブックトークをやらせたことがあるが、それは結構大変だったので、ビブリオバトルだったら生徒たちが乗るかなと思っている。実際に文化祭でやっている高校もあった。

(荒川座長)

受験に絡めてやると大変だ。入試センターで国語の問題というのは非常に難しい。これまでは、過去問を出してしまうのはまずい、過去問を出すのは出題委員の恥のような感じがあった。私が所長のとき過去問を出せと、出していいと、古典でも現代文でも、それをやろうとって、読んでもらいたいやつは出すべきだということで、私が辞める頃に決まったのだが、今はそうやってきたということでいい傾向だと思う。そうすると、現代文でも古文でも読んでほしいやつが出てくる。受験に出るなら勉強しなければならないという役得もあるので、それも一つの大きなことだ。

あと2～3分残っているが、最後にどなたかどうしても一言というのがあるか。なければ、図書館側の方で何かあるか。

(事務局)

今日、皆様からいただいたご意見をまとめて、7月の後半に開く庁内推進会議の場で、このようなご意見をいただきました、さあ、何をやりましょう、何がやれるでしょうというふうな話をいたしたいと思っている。

(荒川座長)

我々はかなり勝手なことを言ったので、そのところはそこで交通整理をして。

それでは、これで終わりたい。

(司 会)

これもちまして、第1回第二次新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を終わりたいと思います。

次回は、9月の中旬をめどに日程調整させていただきたいと考えておりますので、よろ

しくお願いいたします。本日は長時間にわたりまして、大変ありがとうございました。